

「コロノスのオイディプス」(ソポクレス)

テーバイ王オイディプスが、知らずして父を殺し母と同衾どうきんして四人の子を儲まうけてゐた己れのおぞましい過去を知つて、兩眼を抉きつて盲目となり、故國を追はれて二十年、娘アンティゴヌに手を引かれて諸國を放浪した末、今、老殘の彼はアテナイ郊外の聖森コロノスに辿り着いた。アポロンの神託によれば、コロノスこそ彼の終焉しゆうえんの地、しかも彼を受容れる者には恵みを、追つた者には破滅を齎もたらす地なのであつた。それ故、聖森への侵入者として立退きを迫るコロノスの長老達にオイディプスは抗あらがつて、立退きの當否に關する判断はその地を支配するアテナイ王テセウスに委ゆだねたいとて、王の來着を待つてゐると、もう一人の娘イスマネがやつて來て、テーバイの王權を巡つてオイディプスの息子達が争ひ合つてゐると告げる。弟のエテオクレスが兄ポリュネイケスを追放して王權を握り、兄がアルゴス勢を率ゐて反攻を企ててゐるが、オイディプスを味方にした方が勝つとの神託があつて、共にオイディプスに接近したがつてゐるのだといふ。しかもオイディプスを無慈悲に追放した前テーバイ王クレオンが、テーバイをアルゴス勢から守るべくオイディプスの身柄を確保しにやつて來るとも

いふ。それを聞いてオイディプスは、俺が「恥にまみれて父祖の國より追はれん」としてゐる時に、止めようとも、護らうとも」せず、今も「王權のはうがおれをなつかしむ心より大事」だと思ふ息子共の味方などするものかと叫ぶ。そして到着したテセウスに窮境を打明けて保護を求めると、テセウスはオイディプスの運命に同情し、保護を約束して一旦立去る。

そこにクレオンが手兵を率ゐて現れ、心にも無い同情心を示してテーバイに戻れと勧めるが、オイディプスは峻拒する。クレオンはオイディプスが嘗て「知らずにしたことの非をならして」罵倒する。オイディプスは、自ら知りも好みもせずしてやつた事を咎められる謂れはないと反駁する。するとクレオンは娘達を人質にとつて脅迫し、オイディプスを力づくで連れ去らうとするが、テセウスが駆けつけて父娘を救出する。クレオンは捨臺詞を残して退散する。次いでポリュネイクスが現れて父の助力を求め、オイディプスは拒否して、兄弟が「互の手にかかつて死ぬるといふ」呪ひを浴びせる。最後にアポロンの神託通りに雷鳴が轟き、オイディプスは死期を悟り、自分の終焉の場所の秘密を守るならアテナイをテーバイの攻撃から守るとテセウスに約束して、最期の地に赴くのである。

死の前年、作者九十歳の折の作品である。親殺しと近親相姦といふ忌はしい禁制を二つながら「知らず」して犯し、オイディプス自らが語る様に、「罪のありとある穢れの住み家となつた男」に、作者は滿腔の同情を注ぎ、その思ひをテセウスに代辯させる一方、クレオンの徒の如く悲運のオイディ

プスに「恐怖と憐愍」を覺えるどころか、輕蔑し嫌忌するばかりで、權勢欲の虜たる己が陋劣を省みもせぬ手合は容赦無く彈劾してゐる。オイディプスに同情してテセウスが、自分はこの身が「人間」に過ぎぬ事を、また「明日の日は量りがたい」事を、貴方に劣らず良く辨へてゐる、と云ふと、オイディプスは、「テセウス、あなたの氣高い心は、その短い言葉によくあらはれてゐる」と應じる。人間は誰しも未來が掴めぬ「穢れの住み家」でしかない、オイディプスが苦難を通して學んだその知を、ソポクレスはペロポネソス戦争に悶える祖國アテナイに遺言として贈つたのであらうが、彼の死の翌年、アテナイは敗北して衰亡の一途を辿る事になる。(高津春繁譯、「ギリシヤ悲劇全集 Ⅱ」、人文書院)